

愛国主義の妖怪

理事長 毛里 和子（早稲田大学）

この4月、週末になると中国都市部で若者の反日デモが広がり、日中関係を緊張させた。1972年の国交正常化以来最悪の状態だと人々は論評した。日中の経済関係や草の根の交流がこれだけ増えているのに、「なぜ」と多くの人が困惑したにちがいない。中国指導部や公安部門が力で反日の動きを抑え込み、五四の日をふたたび「抗日記念日」として歴史に残すことだけは避けられた。しかし、もちろんのことながら、いつでも再燃の可能性を秘めている。

なぜこのようなことになったのだろう？西安の大学で日本人学生がやった品のないパフォーマンスへの反発、サッカーのアジアカップ予選での重慶事件などすでに予兆はあった。昨年9月～10月にかけて社会科学院日本研究所が行った対日イメージ全国世論調査にも、対日感情の悪化が顕著に出ていた。「親近感をもてない」、「親近感などもってのほか」が合わせて53.6%に上り、「とても親近感をもつ」、「まあもつ」の合計6.3%を大きく上回った（有効回答3000人）。ちなみに、2年前の同じ調査では、前者が43.3%、後者が5.9%である（『日本学刊』2004年第6号）。なお、反日デモ直前の朝日新聞の世論調査では、「中国を好き」だとするもの10%、「嫌い」28%、「どちらでもない」が60%となっている（有効回答1781人。朝日新聞2005年4月27日）。

こうした素地に加えて、日本が国連安保理常任理事国を目指して政治的パワーをアピールしたこと、東シナ海での資源をめぐる紛争や尖閣列島問題、さらには、台湾をにらんだ日米軍事協力の強化、EUの対中武器禁輸に対する日本の抗議など、一連の動きが中国の若者の反発をいっぺんに爆発させたのだろう。それにしても、正常化以来30年余りのさまざまな分野での交流の積み上げは一体なんだったのだろう。

「愛国主義の妖怪」が徘徊している。今回の反日デモでもっとも驚かされたのは「愛国無罪」というスローガンである。もちろん、一国の総理が、むしろアジア周辺国を挑発するように、戦犯を祀った靖国神社に何回も参拝することの“愚”は言うまでもない。またここ数年、東アジアが連携に向けて動き始めているというのに、日本の実態としての「アジア化」が進んでいくというのに、日本のアジア戦略がちっとも見えてこないのも事実である。それにしても、なぜ彼らは、「愛国無罪」を呼び、日本商品があふれているところで「日貨ボイコット」を叫ぶのだろう。それを聞いたとき、一瞬、80年前にタイムスリップしたのでは、とさえ思った。どう考えても、改革開放を押し進め、WTOに加盟し、グローバリズムの波に乗りながら、世界の中で近代化を実現しようとしている国の民のやることではない。彼らの頭の中は1945年で止まっているのだろうか。

「愛国無罪」は文化大革命期の「造反有理」を思い起こさせたが、それで思うことが二つある。まず、そもそも「愛国は無罪」だろうか？「国」のために、「国」の名前でどのような悪がまかり通ってきたか、日本近代の侵略の歴史を見るまでもないだろう。「国」はそれ自体はほとんど悪である。近代中国は侵略した経験をもたない。また現代中国も、対ベトナムを除けば、基本的に平和愛好的であった。だが「国」は、対内的には圧政と抑圧の隠れ蓑になってきた。

もう一つは、いまの中国では「愛国」の表現、デモンストレーションしか「無罪」ではない、という厳しい現実を今回の反日運動ははしなくも露呈したという点である。「愛国」ならすべてが許される、は、逆にいえば、「愛国」以外の政治行動はしてはならない、ということなのだろう。そろそろ「愛国」の輻から解き放たれてしかるべき時なのに。

4月の反日デモは二つのことを教えている。一つは、日本と中国の間では、少なくとも感情的には「戦後」は終わっていないのである。1972年の国交正常化は不完全だったし、その後の二国間関係もその点では不十分だった。歴史を忘れやすい日本は、とくに、まずここから出発すべきだろう。もう一つは、日中関係を侵略と被侵略の歴史だけで見るのは間違っているということである。1945年までの半世紀とそれ以後の半世紀は明らかに違う。トータルに見つめなければならない。そういう「歴史教育」が日中双方で必要なのである。

日韓関係もナショナリズムに翻弄されているように見える。だが、1998年10月、日本側は、「飛躍的な発展と民主化を達成し、繁栄し成熟した民主主義国になった」として韓国をたたえ、韓国側は、「戦後の日本の平和憲法のもとでの専守防衛および非核三原則をはじめとする安全保障政策」などで日本をたたえた(日韓共同宣言)。この相互の敬意があつて両国の最低限の「和解」ができたといえる。日中が、国民を含めて、敬意をもつた関係に成熟していくのは、一つのことなのだろうか。